8　大台ヶ原山中　鹿子木孟郎

昭和七年（一九三二）　油彩・カンヴァス
一一三・〇×一六三・〇

昭和七年、鹿子木は大阪電気軌道株式会社の委嘱による水彩画制作のため、奈良・三重・和歌山の三県にまたがる大台ヶ原、吉野、熊野などを旅行した。このときの水彩画六十点は翌年の一月に大阪三越で開かれた個展で発表された。世界有数の雨水量を誇り、水量の豊かな渓谷として知られる大台ヶ原であるが、当時はまだ一般の観光客が訪れる場所ではなく、わずかな登山者だけが入山する土地であった。鹿子木は先の水彩画とは別に大台ヶ原を描いた油彩画を制作し、同七年と八年の帝展につづけて同地に取材した作品を発表した。本図は自らも審査員をつとめた、同七年の第十三回展に出品されたものである。

本図にも顕著なように、この時期の鹿子木が熱心に取り組んだ題材に、人物画の背景にもよく描かれた岩肌の表現がある。複雑な凹凸を見せる大台ヶ原の渓谷を、まるで強い生命力をもった生きもののように、力強い筆触で執拗に描き込んでいる。この点については、鹿子木の京都における交友関係などから中国絵画の山水画の描画法の影響が推測されており、フランスのアカデミックな歴史画の伝統を継承した画家という、鹿子木のイメージを大きく覆すものである（荒屋敷透「鹿子木孟郎とルネ・メナール―素描にみる鹿子木の主題・技法の展開」『鹿子木孟郎　水彩・素描展』三重県立美術館、平成元年）。画面右下に「TAKESHIRO KANOKOGUL」のサインがある。

鹿子木孟郎（一八七四～一九四一）は岡山に生まれ、初代五姓田芳柳の弟子であった松原三五郎の天彩学舎で擦筆画を学んだ。上京して小山正太郎の不同舎に入門、明治三十三年には不同舎の仲間とともにアメリカへ渡り、ヨーロッパ各地を訪れて同三十七年に帰国した。同三十八年、京都で浅井忠や中沢岩太と関西美術院を創設し、多くの後進を指導するだけでなく、自身も二度にわたりフランスに留学し、ジャン＝ポール・ローランスに師事した。文展・帝展の審査員をつとめるとともに、浅井亡き後の京都洋画壇を主導する立場にあった。昭和七年にフランス政府からシュヴァリエ・ド・ラ・レジオン・ドヌール勲章が授与された。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近代の洋画家、創作の眼差し
三の丸尚蔵館展覧会図録No.52

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年十月三十日発行

©2010, The Museum of the Imperial Collections